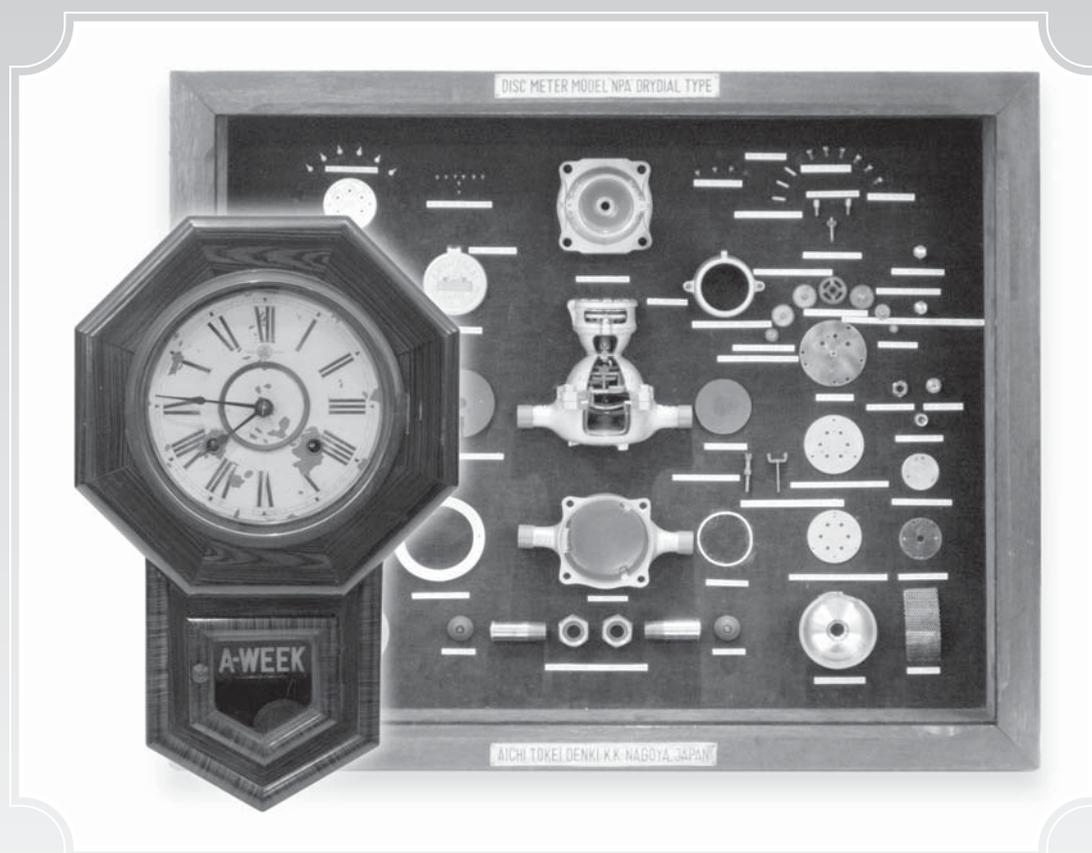


「モノづくりは、人づくり」



1893年製の「柱時計」、1927年頃の「初の国産水道メータ」

提供：愛知時計電機株式会社 <写真説明文>表紙裏

◆内容◆

- 1 巻頭言 日本ガイシ(株)専務取締役 中部品質管理協会副会長 水野丈行
- 2 我が社のQCサークル活動 ～(株)FTS～
- 3 協会だより (中部品質管理推進研究会、品質コラム)

「絶え間なき挑戦」

日本ガイシ㈱ 専務取締役・中部品質管理協会副会長

水野 文行



日本経済を取り巻く環境は、欧州金融危機の深刻化や円高の進行など先行き不透明な状況が続いています。また、製造業における新興諸国との競争激化もあり、企業にとっての事業環境は益々厳しさを増していると言わざるを得ません。

企業の持続的成長のためには、このような事業環境に対しても迅速で柔軟に対応することが必要で、こうした競争力の源泉となる対応力を持つ強靱な企業への挑戦は従来にも増して重要となっています。

日本ガイシでも先のリーマンショックの後、強靱で効率的な製造現場の構築を目指す活動として、2009年度から3年間「ものづくり構造革新」に取り組んできました。以前から継続して各種の改善に取り組んでいますが、深刻な事業環境に直面し、あらためて原点に立ち戻り、これまでいろいろな理由で取り組めていなかった思い切った改革にも挑戦しようという理念の活動です。この活動では、それぞれの事業部門がやりたい姿を描き、それを目指して 営業、技術、製造などの全ての部門が一丸となって取り組んできました。活動を通じて、諦めず愚直に知恵を出し合えば自ずと結果がついてくることを皆が体験することができ、活動期間が終わった後も各部門が継続してさらなる挑戦に取り組んでいます。またこれらの活動を通して若い人たちが、現在の設計や製法に至った軌跡と根拠を知る機会が得られ、技術の継承に役立つとともに、より良い商品を追求してきた先人たちの情熱の一端に触れることができたのも大変良かったと思います。

一方、品質に目を転じると、お客さまでの使われ方の変化や製品技術の高度化・複雑化などがあり、品質保証のあり方もそれらの変化に応じて変えていく必要があると思います。使われ方や技術の変化が及ぼす影響を明らかにし、品質面では、安全性や信頼性などを徹底的に検証することが重要ではないでしょうか。その時、先人たちがより良い商品を社会に提供したいという思いで脈々と築き上げてきた企業の文化をあらためて思い起こすと同時に、ありがたいものづくりの姿を追求する心を伝えていくことも大事にしたいと考えています。

事業環境はとどまることなくこの先も様々に変化していきます。そうした変化に対応できるような強靱な企業への挑戦に終わりはありません。

我々の先人たちが築き上げてきた良き文化を受け継ぎ、ありがたい姿を絶え間なく追求することにより、これからも強靱な企業に向けて挑戦し続けていきたいと思っています。

今月の表紙

「名古屋の時計産業」は徳川家康の時計を修理したことが、始まりです。

界隈には、大名お抱えの御時計師（おんとけいし）という技術者がおり、金属加工を生業とする飾り職人も多数住んでいました。

加えて、木曾、飛騨ヒノキの集積地であり、木工産業には好適地であったことから、明治30年頃には、全国一の時計産地として

発展しました。写真の時計は、明治26年製であり、弊社が「愛知時計製造合資会社」時代のものです。

一方、水道メータに関して、昭和2年より、度量衡法による許可制の下、弊社を中心に国産化が始まり、現在も当社事業の基盤となっています。当時のものは、ほとんど金属部品で構成され、指示部は、時計の歯車加工技術などを応用したものであり、計量方式は、円盤部をうまく回転させて、連続的に桁を設ける構造の「実測式」と呼ばれるものでした。

株式会社 F T S

(株)FTSは、自動車の鉄製燃料タンクなど金属加工主体の「堀江金属工業(株)」と樹脂製燃料タンクシステムを専業とする「(株)エフティエス」が2008年10月1日に合併して発足した燃料系総合システムメーカーです。国内6工場(従業員1,650名)およびタイ、インドネシア、アメリカ(海外従業員計1,790名)にて、主力製品である鉄製・樹脂製燃料タンク、およびその周辺部品を燃料系システムとして企画・設計から生産・販売を行なっています。

弊社は、人材育成およびチームワーク力向上の一環としてQCサークル活動に力を入れています。2007年までは一部の小集団活動で、全体としては活発な活動とは言えませんでした。社員の問題解決力低下を憂慮したトップの決断により、2008年4月から本格的にQCサークル活動を再開しました。

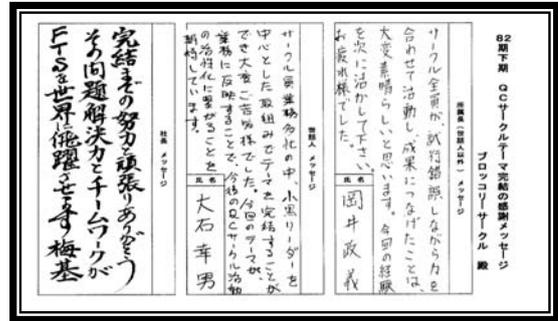
再開にあたり、活動対象を製造部門だけでなく事務・技術部門も含めた第一線のメンバー全員で構成される約140サークル(サークル員約1,000名)が、半期に1テーマを必ず完結できるよう活動しています。そのため、サークル毎に決められた職制のアドバイザーがつき、テーマ完結に必要な支援、指導を行なっています。また、サークルリーダーとアドバイザー全員に対して、心構えと活動の進め方について社内教育を行なっています。

各サークルの会合開催状況やテーマ進捗状況を一覧表で見える化し、社内各所の掲示板に公開しています。また、社長が委員長を務めるQCサークル委員会を毎月開催し、進捗遅れが発生しないよう活動状況の確認や活動活性化方策について検討しています。

全サークルの発表会は、年間2回(半期毎に1回)ブロック毎に開催しています。委員長・副委員長(役員)が全ての発表会に出席し、激励や感謝のメッセージを伝えるとともに、改善点について指導します。

今年は、新たに社長はじめ、所属長が直筆で感謝の気持ちを伝えるメッセージカードを作成し、ブロック発表後にそれぞれのサークルへ渡すことによってサーク

ル員が“頑張って良かった”と感じてもらえるよう工夫しました。



この他、年に1回優秀事例を発表する全社発表会を行なっています。さらに、昨年からは国内と海外拠点の代表サークルが参加するグローバルFTS QCサークル発表会を開催しています。今年の大会には、関係会社27社60名を含む約140名が聴講し、トヨタ自動車(株)殿や中部品質管理協会殿にも講評や激励をいただきました。



今年は、更なる飛躍を目指し、社外の大会である中部品質管理大会「職場改善事例発表大会」のQCサークル事例部門と推進事例部門に出場。この大会の経験や刺激を基に更なるQCサークル活動の活性化に繋げていきます。

弊社は、これからもトップをはじめ管理・監督者が常にQCサークル活動に関心をもち、PDCAサイクルを回しながら活動を活性化させ、一人ひとりの成長とチームワークによって“世界No.1の品質と技術でグローバルに発展し続ける燃料系システムサプライヤー”を目指して行きます。(FTS 総務部 記)

「中部品質管理推進研究会」の活動報告

2011年9月、当協会は、社内で品質管理活動の推進役を担う方々が、品質管理の手法活用、推進方法を研究する相互研鑽の場として、本研究会を設けました。

会員企業より第1期生として14名の参画をいただき、以来、1回/月のペースで2013年8月まで開催予定しております。この1年で実施した内容は以下の通りです。

2011年9～12月 研究テーマ抽出

*課題洗い出し、文献研修、各社実践状況の情報交換と共有化、ハンズオン（トヨタ自動車(株)元町工場見学等）

2012年1月～ 2つのワーキンググループに分かれて研究

*①品質管理教育ワーキンググループ：社内品質教育・講師の在り方

②製造現場の品質意識・改善ワーキンググループ：ツール作成と解析方法の標準化

2年目は、作成したマニュアル、ツールの自社適用等、より実践の段階を迎えます。

本研究会メンバーは随時募集しております。御関心ある方は、是非ご連絡下さい。

furuyaの品質SAIKOU

「QC七つ道具」とは何か。昨年10月に制定された、日本品質管理学会規格「品質管理用語」(JSQC-Std00-001:2011)の17.1項に「QC七つ道具」の解説があるのでその一部を引用する。

そこには「品質管理を進めるうえで基礎になる、データのまとめ方に関するツールの集合」とあり、注記1として「通常パレート図、特性要因図、ヒストグラム、グラフ/管理図、チェックシート、散布図、層別のことをいう」と記されている。

ポイントは「データのまとめ方」にある。私たちの周りにはたくさんのデータがあるが、それらの「ばらつき」「変化」は必ずしも目に見えていない。「QC七つ道具」はそれらを判り易く表して、教えてくれる道具と言える。関係者全員が「ばらつき」「変化」の実態を定量的に把握して共有することができれば、「いつもと違う」という異常の早期発見、早期対応が可能となる。

品質管理とは「ばらつき」「変化」との戦いである、と以前このコラムで書いた。そうなるとうるせいで戦えない。「ばらつき」「変化」を打ち負かすための道具が必要になる。その最も強力な道具こそが「QC七つ道具」なのだ。石川馨先生は「私のこれまでの経験では、企業内の問題の九十五パーセントまでは、この七つ道具の活用で解決できる。」（「日本的品質管理（1981日科技連出版社）」より）と述べられている。全員が「QC七つ道具」の正しい使い方を勉強して、上手に使いこなしていくことが、企業の持続的な発展につながっていくのである。

【編集後記】 今年の七夕、久しぶりに東海地方は星空をおがめましたが、皆さんは何を願われたでしょうか。私は国の平和を祈りました。原子力発電再開など大きな決定が行われ先行き益々混迷ながら、希望を失わず未来を切り開きたいと思います。（細）

（発行元）

中部品質管理協会

〒450-0001 名古屋市中村区那古野1丁目47-1 名古屋国際センタービル11階

TEL (052) 581-9841 FAX (052) 565-1205

<http://www.cjqca.com>